

巻頭言

農・林・水の持続的利用と連携構築のために —政策研への期待—

漁業経済学会 理事（元・東京海洋大学大学院 教授） 末永 芳美

「農」の字源を辿ると、「林」と「貝」の会意文字とのこと。つまり、林地と海の境を、貝殻を使って耕して「農地」を開拓して、食料を効率的に得る手段を獲得して農業が興った。

さて、牡蠣の養殖業を営む漁師の方による、「森は海の恋人」を合言葉に山に植林する運動が世間の注目を集めた。これが小・中学校の教科書にも紹介された。そのように、深い森とそれに寄り添う沿岸域は相性が良いようである。

その、森と海を離れさせた「農」に「工業」が加わり林地と海の境に、都市がつくられ人口が集中した。特に戦後の高度経済成長期以降の変化は著しかった。

現在のわが国の農・林・水の現状を俯瞰的に見るとこのよう（私見）になるのではないか。

農村は、耕作放棄地や荒れた竹林の増加、区画整備されたがメダカのいなくなった水田、マツタケの採れない赤松林、戦後植林されたスギの人工林とその副産物のスギ花粉の飛散、沿岸域には松くい虫被害に遭う黒松防風林、潮干狩のアサリがいなくなった干潟、内水面河川や湖沼には外来魚の増加と言うように、農山漁村を取り巻く環境や景色は人の一世代を経ぬうちに急変した。

統計的にも、「農」の低い食料自給率（令和2年で供給熱量ベース37%）、「畜産」も外国産飼料への高い依存度（飼料自給率25%）、「林」についても輸入材への高い依存度（令和2年木材自給率41.8%）である。水産でも漁獲量の減少だ。

石炭・石油へのエネルギー革命で薪炭材も不要になり、森林材利用を放棄・低下させマツタケや黒松林の松露を絶滅させかけている。以前は竹材を海苔ひびに使っていた漁師も今ではFRP製の竿に転換した。これらも竹林の荒廃を促進した。かつてスギ材で建造した漁船もFRP漁船に変わり木造漁船は消滅した。

上述した動植物はいずれも日本の農山漁村を象徴するものでもあった。メダカは今では絶滅危惧種で、学名に、*Oryza*（属名にコメの意）が付き水田の米と共生してきた。スギには*japonica*（種名が日本）が、マツタケには*matsutake*（種名にマツタケ）が、アサリには日本近隣の*philippinarum*（種名にフィリッピン）が命名されている。

しかし米飯食の減少、スギ材による家屋建設の戸数減等、過疎高齢化による人口減少で農山林地の放棄や寡少利用と人間の「手入れ」が入らなくなったことが農山林地の荒廃の要因だろう。森林は川を通し海までつながっていたが、河川に流れ込んだ倒木林は山林の誰かの所有物なのに回収されず、海まで流れて行っては沿岸の定置網などを破壊する厄介者となった。

わが国の漁業にも、暗い話が多い。サンマ（22→3万トン）、スルメイカ（24→4万トン）、シロザケ（16→5万トン）など漁獲量は急減している（いずれも、平成22年以降の最大値と現在を比較）。どの魚種も庶民の味方であったものが今や高級魚化している。

アサリも昭和58年には16万トン以上採れていたのに、現在は43百トン以下、ピーク時の40分の1だ。特にアサリは他でもない「農」と最も近い所に生息する資源。ところが、日本の干潟からアサリが消え、真っ黒い海苔が褐変している。河口域に発達した町や都市はかつて富栄養化した水を河川や海に流し込み赤潮などを多発させた。海を汚してはいけないという「反省」から、今では、陸から海には滅菌した栄養塩のない下水処理水が注ぎ込んでいる。それでは「水清くして魚棲まず」となってしまう。

また、農薬や除草剤、化学肥料利用型から、有機農業への流れはあるものの海へ流れて行く農業排水には目が届かない。森から海まで豊かなミネラルを含んだ水を通して栄養塩が循環してこそ、海の生産力が戻ってくる。これからの日本の農・林・水の循環・調和を図るため人口減で管理が行き届かない農・林・水を取り巻く環境を多様化し「手入れ」できることが、漁業としても高齢化で急減している就業人口（135万人）を食い止める道だ。「水」、特に沿岸漁業、は「農」「林」とつながっている。政策研の所掌事務は、農林水産に関わる「政策の総合的な調査及び研究」と規定されている。森林、田畑を流れ下る水の持続的循環ができるように、政策研には総合的な政策的提言を期待したいものだ。

